ふるさと再発見！ VOL.30

ほうぼう わかやま

巻頭特集

わかのうら1300年の手土産
—海と和歌の贈りもの—

散策
足元に和歌山市を一望 −高津子山・潮騒の小径ウォーク−

ものづくりat和歌山
用の美を携えた 確かな手しごと −桶濱−

わかやま魅力発信人
塚田由里子さん ～笙奏者～

I♥WAKAYAMA 私の和歌山
和歌山県知事 岸本周平さん

わかのうら1300年の手土産

～海と和歌の贈りもの～

1300年前、聖武天皇の昔から、日本を代表するリゾートのひとつとして知られてきた「わかのうら」。訪れた人たちは和歌に詠まれた海や山の風景を楽しむとともに、この地ならではの産品に触れてきた。旅人が詠んだ和歌や、残された記録を読み解き、それぞれの時代の「名産品」を紹介する。

わかのうらと言えば、貝

万葉集の歌「若の浦に袖さへ濡れて忘れ貝拾へど妹は忘らえなくに」。また、中世の歌人・西行の「浪かかる吹上のはまのすだれ貝風をぞおろすいそぎ拾はん」。いずれの歌にも登場するように、和歌の浦周辺の名物として、貝類は古くから知られていたらしい。

江戸時代後期の『紀伊続風土記』（以下『続記』）では、「衣通介（貝）」の項に「和歌浦玉津島の名産」の特記がある。衣通姫と言えば玉津島神社に祀られている神様なので、そのゆかりもあって名産品となったことがうかがわれる。

さらに「簾介（貝）」の項では、先の西行の歌を引いて「荒浜および和歌浦に多く産す名品なり」と紹介されている。

「歌仙貝」ってどんなの？

では、江戸時代のわかのうらでは、どんなものがお土産として売られていたのか。『和歌浦名所記』（以下『名所記』）には、名産として「たまつしまのかき、和歌のり、ちりめん魚子、この葉かれい、歌仙貝、葦柄のうちは、葦軸の筆、松のやうじ、名所記、絵図」と記されている。

このうち、「歌仙貝」は平安時代に活躍した36人の歌人

不老橋付近の海苔場

「絵本歌仙貝」の1番目。「すだれ貝」の題で西行の歌を引き、貝を拾う娘の姿を描いている。「すだれ」の語から「吹きおろす」と言い続けているところが面白いとの評。▶

文化8年（1811）以前とみられる絵図。『和歌浦名書記』にも名産として「絵図」と記述。玉津島神社を中心に、周辺の名所と和歌が紹介されている。紀三井寺や布引、琴の浦、藤白から遠く淡路島までが描かれている。

「三十六歌仙」にちなんで、貝を詠んだ和歌36首を選んだもの。江戸時代にはその36種類の貝殻をセットにし、茶屋等で販売していたという。

江戸時代中期には、歌仙貝をテーマにした「絵本貝歌仙」が出版された。こちらでも先の西行歌が最初に登場することから、西行の歌と相まって貝の名産地としてのイメージが定着していたことがうかがわれる。

万葉歌と関連して

わかのうらに関する歌で最も知られているのは、万葉集・山部赤人の「若の浦に潮満ち来れば潟をなみ葦辺をさして鶴鳴き渡る」だろう。歌いこまれている「葦」を使用したのが筆だ。

『名所記』にもあるように、江戸時代には名産のひとつとして数えられている。『続記』には、「筆」の項に「近年和歌浦の葦軸の筆」や「玉津島松の緑軸筆」が多く製造されていることが記されている。同じく「葦」を利用したものとして、『名所記』には「うちは」の記述もある。

『続記』によると、わかのうらでは塩の生産も盛んで、「五色塩（ごしきじお）」なるものが製造されていた。ただし、当時は三葛（みかずら）村産の塩が「第一の佳品」とされていたようで、和歌浦産は「少し劣れり」という評価だ。

「貝」から「海苔」へ

このほか、江戸時代から名産として知られるようになったもののひとつに海苔がある。『続記』の記述は「和歌浦の産」は「浅草海苔に類して頗上品（すこぶる）なり」。高級品の扱いを受けている。

和歌浦小学校の校歌に「海苔の笹立つ藻くづ川」とあるように、明治時代以降には、海苔の養殖はわかのうら地域の一大産業に成長した。「昔の和歌浦」と言えば、海苔を付着させるメダケや乾燥させる簾の風景を思い浮かべる人も多いだろう。

海と和歌。風景だけではなく、お土産も。わかのうら地域では古くから土地の恵みを生かした名物が知られており、そのことも全国から旅人を呼び込む一因となったのかもしれない。

名産を買うなら明光商店街

「台所」の賑わい再び―

わかのうらの名産品を手に入れるなら、明光（めいこう）商店街へ。昭和の時代には「和歌山市の台所」と言われるくらいの人出を見せた地域の商店街は、かつての賑わいを取り戻すべく、地道な取り組みを続けている。

ランドセルをもがれる

わかのうらの名産品と言ってまず思い浮かぶのは、新鮮な魚介類と、海苔やかまぼこなどの加工物。それらのものが手に入り、日用品やお菓子もそろっている。昭和の時代、明光商店街はそういうイメージのメインストリートで、まっすぐ歩くのも難しいほどの買い物客であふれていた。

「子どもの頃は人ごみにランドセルももがれるような感じだった」。そう振り返るのは、昭和40年（1965）生まれの保井元吾さん。明光商店街に生まれ育ち、現在も和歌浦地域の活性化に尽力している。

「明光」は1300年前から

「明光」の名は、この地を訪れた聖武天皇が「海を眺めるのに最も良い所だ。弱浜を改めて明光浦と呼ぶように」と命じたことに由来する。1300年前からの、由緒ある名称を背負っている。

商店街には、100年以上の歴史を誇る商店や企業も少なくない。保井さんが社長を務める米穀店「株式会社やす

現やすいの明治25年（1892）の暦。
「米萬（こめよろず）商」とある。

創業140年の書店 まつき本店

い」も、創業は万延元年（1860）以前。この地に軸足を据え、長い歩みを刻んできた。

アーケードとトイレ

全国的に商店街の運営が厳しくなるなか、明光商店街の活性化を担ってきたのが、長く組合長を務めた鳥居信次さんだ。90歳を迎えたが、今も現役でトリイ商店を経営している。

鳥居さんが手がけた取り組みのひとつが、いくつかの商店が入るミニアーケード「明光マーケット」だ。平成26年（2014）に廃止になったが、オープンした昭和40年代から、商店街の目玉として人気を集めた。

このほか「トイレがない」「駐車場がない」などの問題の解決にも着手。行政に働きかけて、御手洗池に公衆トイレが設営された。

活性化へ現地調査

次の世代へ引き継ぐ

鳥居さんは今後の商店街について「時代の流れは激しいが、次の世代が頑張っている。何とか盛り上げてほしい」と力を込め、保井さんらの世代に期待を寄せる。

最近では、この地域で子育てをしたいという移住者や、空き家を利用したマーケットイベントを開催する若い世代も現れてきた。1300年の記念の年を前に、1300年の名を持つ老舗の商店街が存在感を増している。

玉津島神社とうさぎ

わかのうら一帯の御霊（みたま）を祀（まつ）る玉津島神社は、うさぎと縁が深い。うさぎは古来、子孫繁栄や豊饒（ほうじょう）をもたらす神の使いとされており、玉津島神社では神紋や授与品の数々に、そのかわいらしい姿を見ることができる。

うさぎが玉津島神社の「象徴」となった由来は、祭神のひとつである神功皇后が卯の年・卯の月に合祀（ごうし）されたから。「卯」はうさぎのことなので、この故事を端緒に、玉津島神社とうさぎは深く長い縁で結ばれている。

足元に和歌山市を望

―高津子山・潮騒の小径ウォーク―

雑賀山には3つの頂がある。紀州東照宮の権現山、和歌浦天満宮の天神山、そして高津子山だ。雑賀山の最高峰・高津子山の山頂からは、東西南北、全方位の和歌山市を眼下に望むことができる。「絶景の宝庫」和歌の浦を代表する大パノラマ。和歌山に住んでいるなら一度は見ておきたい景観だ。

❷ **展望台**
高津子山はその形から章魚頭姿山（たこずしやま）とも呼ばれている。標高151mの山頂からは和歌山市が一望できる。

❶ **潮騒の小径（しおさいのこみち）**
昭和55年に整備されたハイキングコース。バス停「和歌公園」から雑賀山を経由して、多野・雑賀崎地区の市街地を抜け雑賀崎灯台の手前まで続いている。

アクセス

自動車
阪和自動車道・和歌山南スマートICから約20分

電車・バス
JR「和歌山市駅」から和歌山バスで約20分
JR「和歌山駅」から和歌山バスで約30分

雑賀山を横断するハイキングコースが、「潮騒の小径」だ。

バス停「和歌公園」が目印で、その裏手が出発点となる。緩やかな山道なので、親子連れやお年寄りの姿も目立つ。

権現山のコースをしばらく進むと右手に視界の開けた場所がいくつかあり、町の様子をのぞくことができる。天神山の分岐からは天満宮に下りることが可能だ。

高津子山に向けて進んで行くと、T字路に差し掛かる、右手に向かって登って行くといよいよ高津子山の頂上に到達する。

この場所にはかつて、ロープウェイが設置されており、登ったその先の360度回る回転展望台は、新和歌浦の観光スポットだった。1997年（平成9年）にロープウェイは撤去され、回転展望台も姿を消したが、1999年（平成11年）に現在の形の展望台が建てられた。

南には片男波の海岸からマリーナシティ、海南市の藤代まで、東に目を移すと名草山の中腹に立つ紀三井寺が。北は麓に養翠園から和歌山港。さらに和歌山城や紀ノ川を挟んだ先には和泉山脈までを見渡すことができる。西は、と見ると雑賀崎灯台が眼下に。海の先には淡路島、天気がいいと四国まで望む事ができる。

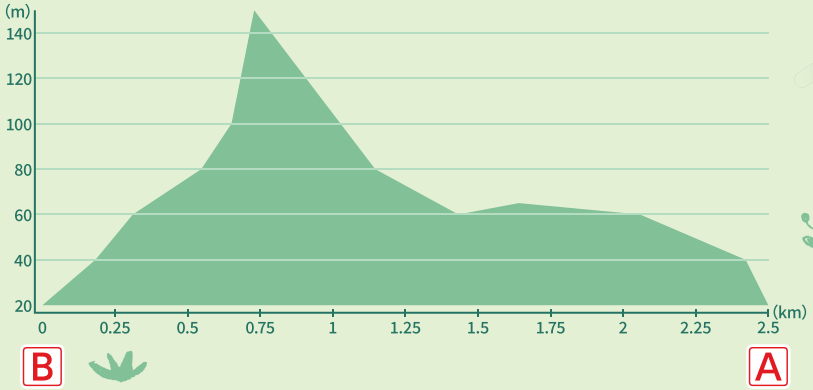
高津子山の山頂は和歌山県朝日夕陽百選にも指定されており、海の彼方に沈む夕陽は一度は見ておきたい絶景だ。

眺望を堪能した後は来た道を引き返し、先ほどのT字路を今度は下りへ。そこにあるのは国産飛行船の初飛行に成功した山田猪三郎の顕彰碑だ。そのまま道路まで降りるとバス停「新和歌遊園」があり、そこから海岸沿いの遊歩道へ。見えてくるのは蓬莱岩だ。砂質片岩と泥質片岩の層岩は穴の空いた奇妙な形をしている。蓬莱岩を過ぎると和歌浦漁港に到着する。

和歌浦漁港のおっとっと広場では、地元の新鮮な魚介類を楽しむことができる。名物のわかしらすを食べ、ハイキングの疲れを癒やすのも、このコースの楽しみ方ひとつだろう。

❹ **蓬莱岩（ほうらいいわ）**
遊歩道沿いの砂利浜から海に突き出す、真ん中に穴のあいた奇妙な形の岩。縁起が良いと人気のパワースポット。

❸ **山田猪三郎顕彰碑（やまだいさぶろうけんしょうひ）**
和歌山市生まれの山田猪三郎は、気球や飛行船の開発で飛行機が飛ぶよりも前に日本の空を開拓した航空業界のパイオニア。



用の美を携えた確かな手しごと

飯切やお櫃、風呂桶や手桶など、
かつてはどの家庭にも桶があった。
産湯に浸かる盥から棺桶まで、
人生と密着する桶を、「正直」を
信条に作り続ける職人の技とは。

ものづくり
at 和歌山

木桶

暮らしも産業・流通も

国土の約7割を森林が占める日本では、古くから木工製品が作られ、容器としては、刳物（木をくり抜く）、曲物（薄板を曲げる）、指物（板材を組み立てる）、結物（木片を繋ぐ）、挽物（回転させて削る）などの加工技術が発達した。このうち、側板を円筒状に並べて箍で締めた結物が、桶と樽だ。その製作技法は、鎌倉時代に大陸から九州北部に伝来したとされ、室町時代には全国へと広がった。

「密閉型でない」桶は一時的な容器として使われ、蓋があってものせ蓋である。一方、樽は「密閉型」で食料の運搬や貯蔵（熟成）など長期的に使用される。生活用具はもちろん、産業や流通のあらゆる分野で用いられていた。

リユースは当たり前

かつては醤油や味噌、酢に味醂、酒などの醸造にも木桶が使われていた。酒蔵で使う大桶は使い古されると醤油や味噌などの業者が下取りして再利用した。塩分が目詰まりして、漏れることは少なかったという。また古くなると、バラして小さい桶に作り直し漬物屋で再利用された。桶の寿命は100年～150年。最後には薪（まき）に活用された。箍の締め直しや傷んだ部分の交換で、修繕を繰り返すリユース・リサイクルは、桶屋にとっては当然のことだった。

発酵食品が注目されている昨今、ステンレスや琺瑯（ほうろう）などの工業系タンクから〝まろやかな味わいに仕上がる〟木桶仕込みに回帰する醸造所が増えている。

職人→会社員→職人

田辺市中辺路町にある木桶屋「桶濱（おけはま）」の松本濱次（はまじ）さんは、木桶職人。昭和9年（1934）生まれの89歳。父親の勧めで18歳の頃に田辺市街の桶職人に弟子入りした。当時は、国鉄職員が桶屋に転職するほど羽振りのいい職業だった。20代半ばには、大阪の味噌製造会社へ大量の桶を卸す多忙な日々を送るようになる。

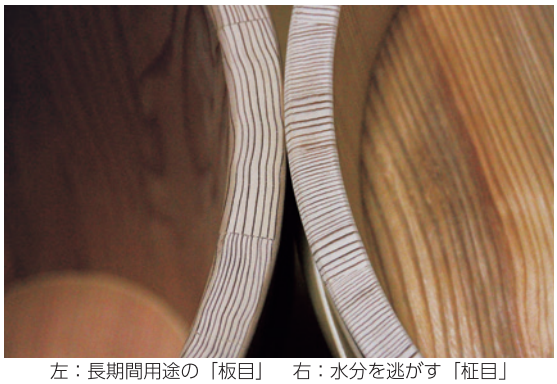
ところが、1960年代後半、転機がおとずれる。大阪へ月末の集金に行くと「来月からは必要ない」と言われ、プラスチック容器を見せられた。需要の激減で桶屋を廃業せざるを得ず、製材会社に転職した。

その後、約30年、定年退職後に故郷に戻った松本さんに近所の人から桶の修理の依頼があった。長く手作業から離れていたが、それをきっかけに桶づくりを再開。材料は、樹齢80年以上の熊野杉や高野槙と、自ら切り出した地元の真竹などで、すべての工程を一人で作り上げる。

「正直」にきっちりと

「樽（くれ）」という側板が接する面に角度をつけて削る工程を〝正直〟という。何度も削り、専用の定規「かいかた」で丸みと角度を正確に測り揃えるのだ。手抜きをすれば、はっきりと出るため〝正直にきっちりと〟が師匠から教え込まれた信条だ。

また桶の用途によって木目を使い分けている。飯切には水分を吸収し放出する「柾目（まさめ）」を用い、味噌桶には水分を通しにくい「板目（いため）」を用いる。きっちりと用を成してこそ、木工製品は美しい。



左：長期間用途の「板目」　右：水分を逃がす「柾目」

桶の需要は少しずつ回復しており、ライフスタイルに合わせて味噌桶は5kg、お櫃は2合や3合用など小さいものが主流になってきているとのこと。客から「こんなものを作ってほしい」と新しいアイデアを貰うのがなにより嬉しい。変化を受け入れ、時代に合わせた職人仕事をする。木桶は手入れをすれば一生ものになる道具。丁寧な暮らしやサスティナブルな生活に木桶を組み込む人がいる以上、松本さんは手を動かし続ける。

側面を削る丸鉋。直径にあわせてサイズもさまざま。

桶濱（おけはま）

〒646-1401 田辺市中辺路町野中1253
TEL：0739-65-0561
営業時間：8時～18時　不定休

森の名手・名人　認定（平成27年）
和歌山県名匠　表彰（平成30年）
田辺市文化賞　受賞（令和元年）

わかやま魅力人発信

笙奏者
塚田 由里子さん

和歌山の歌、雅楽の音色で

今回は東京都出身で、笙（しょう）奏者の塚田由里子さんに、日本古来の音楽に親しむ立場から、和歌山の良さを語っていただいた。

白浜のおばちゃん

テレビ番組で紹介された南方熊楠に興味を持って、和歌山に旅行したのが24歳の誕生日。その時、白浜で出会った地元の「おばちゃん」が、熊楠の生家や闘鶏（とうけい）神社、高山寺（こうざんじ）など、ゆかりの地を案内してくれた。

その親切さ、東京ではあまり経験することのない距離の近さは驚きだった。「自分が将来、和歌山に住むことになるなんて、思いもよらなかったけれど、すごく好きな場所になりました」。明るく雄大な紀の国の自然とともに、強く印象に残った。

和歌山行きを後押し

縁とは不思議なもので、約10年後、夫が和歌山で働くことになった。それまで数学教員として勤めていた塚田さんも学校を辞し、一緒に和歌山へ。旅行の時のイメージもあり、あまり迷うことなく夫の背中を押した。

実際に住み始めてからも、和歌山の印象は変わらない。海も山も人もきれいで、優しい。特に和歌の浦地域の海が好きで、その穏やかな波音に癒やされている。

笙と出会ったのは、それからしばらく経って、和歌山の生活にも慣れた頃。大河ドラマなどで興味を持っていた雅楽の教室が和歌山市民会館で開かれると知り、門をたたいた。東北で震災が起こった後で、敷居が高いと思わずに何でもやってみようと思っていた折だった。

パイプオルガン？

笙は、17本の長短の竹管をお椀に差し込んで組み合わせた管楽器で、日本の伝統的な音楽である雅楽で用いられる。高さの異なる複数の音を同時に鳴らす「和音」を奏でることができるのが特徴だ。その音色は「天から差し込む

雅楽に用いられる楽器・笙。その姿は羽を休めた鳳凰にもたとえられる。

光を表す」とも言われている。

パイプオルガンと共通のルーツを持つという説もある。塚田さんが「習い始めた頃に『G線上のアリア』を吹いて、すっかり夢中になった」と振り返るように、クラシックとの相性も良い。

美しい音色を奏でるためには、手入れも大事。笙は湿気に弱いため、演奏の前後はもちろん、合間にも、湿気が楽器のなかに溜まらないように火鉢や電熱器などで暖める必要がある。

今でも、雅楽の研究や笙の稽古に没頭していると、あっという間に一日が過ぎる。それほどに魅力的な笙に少しでも親しんでもらいたい。そういう思いで、塚田さんは神社や学校での演奏会に参加している。

万葉歌に曲をつける

和歌山には、雅楽とリンクする遠い昔からの文化が残っている。熊野古道や高野山、和歌の浦は数々の歴史物語の舞台で、海と山のダイナミックな自然は、笙が奏でる古代の音色と響き合う。

そんな環境のなかで取り組んだのは、和歌の浦の風景を歌った万葉集の歌に曲をつけること。塚田さん自身がどうしても覚えることができなかった長歌を、雅楽の越天楽（えてんらく）の旋律にのせて歌ってみたところ、すんなりと体に入ってきた。

演奏会で来場者とともに万葉歌を歌うと、そこに詠まれた風景をみんなで共有しているような気分になる。「笙の素晴らしさはもちろん、雅楽を通じて、和歌山の素晴らしさも伝えていきたい」。そのために、笙と向き合う日々が続く。

塚田　由里子

1968 年、東京都生まれ。慶應義塾大学理工学部卒業。2004 年に和歌山市に移住。雅楽との出会いは文化庁の「伝統文化教室」（和歌山市民会館）にて。県内の学校や神社などで笙を演奏するほか、東大寺二月堂のお水取りや唐招提寺での奏楽に参加。

ふるさと再発見！
ほうぼわかやま
を
動画でも楽しもう
YouTube

動画QRコード掲載ページ
P7,P8,P10

各ページのQRコードを
読み込むと、内容に応じた
動画が再生します！

YouTube ほうぼわかやま

I ♥ WAKAYAMA 私の和歌山

聖地リゾート！和歌山

和歌山県知事　岸本　周平

観光立県和歌山のキャッチフレーズを新たにつくりました。

それが、「聖地リゾート！和歌山」です。

和歌山の観光を売り出すのに大切な三つの「S」。まず、高野山・熊野に代表される「Spirituality（精神性）」。SDGsにもつながる自然の豊かさに象徴される「Sustainability（持続可能性）」。そして、豊かな自然から生み出される上質な「Serenity（静けさ）」です。

和歌山は、古くから神々がいる聖地だけでなく、文化、歴史、温泉、食などの様々な聖地を生み出しました。そして人々を寛容に迎え入れ、訪れた人々の心や体をいやしてくれるリゾートとして親しまれています。

霊場でありながら熊野は女人禁制ではありませんでした。一三〇〇年前からジェンダー平等です。小栗判官照手姫の物語のように、障がい者が一人でも熊野詣のできるユニバーサル・ツーリズムがありました。熊野はよみがえりの地です。

古事記や日本書紀にも出てくる地名が今でも使われている神代の時代から続く土地柄で、神武天皇を熊野から吉野へ案内したヤタガラスは日本サッカー協会のエンブレムとしてワールドカップの勝利を呼び込んでいます。

また、七二四年に聖武天皇が和歌の浦に行幸されてから、令和六年で一三〇〇年を迎えます。その素晴らしい風景を末永く守るよう詔が発せられたように、和歌の聖地・和歌の浦は、様々な芸術や文化を育み、今もなお人々を魅了し続けています。

「知らないオドロキが色々色々」をコンセプトにビックリマークを付けたロゴも同時に発表しました。新しいキャッチフレーズの下、国内外から大勢のお客様に来てもらえるように頑張りますので、応援よろしくお願いいたします。

知らないオドロキが色々色々

聖地リゾート!!!!!
Seichi Resort WAKAYAMA

和歌山

編集後記

少し前、ゲーム会社に勤める友人から、ディレクターを務めたソフトのストーリーについて感想を聞かせてほしいと連絡がありました。「ゲームはほとんどしないよ」と返すと、「純粋にシナリオについての意見が欲しいだけ」との答え。情報誌をつくる人間としては、そういう相手として選んでもらえるのはうれしいことです。

考えてみると、ゲームでも情報誌でも、あるいは小説でもユーチューブでも、「面白い」を考えるという根本は同じなのかもしれません。それを伝えるためのかたちが、それぞれ違っているというだけで。

『ほうぼわかやま』は節目となるこの30号から、いくつかのページで、記事に動画をプラスしました。文字と写真だけではイメージするしかなかった音や動きを実際に見ながら、記事に書かれている「面白い」をよりリアルに感じてください。みなさんにもっと「面白い」を感じてもらえるよう、私たちはこれからも伝え方を追求していきます。

編集長　宇治田 健志

「ほうぼわかやま」発行について
和歌山の歴史・文化を掘り起こし郷土愛を育む一助になればと、弊社が自費で2008年から年2回発行している情報誌です。また、この活動を通して、郷土と社内の活性化の両立を図ることを目的としています。
設置場所：和歌山市内のコミュニティーセンター、県内の図書館、TSUTAYA WAYなど
詳しくはホームページをご覧ください。

ほうぼわかやまのバックナンバーは弊社ホームページからもダウンロードできます。
詳しくはウェブで検索→ **https://w-i-n-g.jp** ウイング 和歌山 検索

協力機関　本誌を作成するにあたり、次の機関・団体にご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。（順不同・敬称略）
玉津島神社、株式会社やすい、トリイ商店、株式会社北畑海苔店、松木本店、桶濱

アンケートで当たる!!

感想をお寄せいただくと…
抽選で6名様に
玉津島神社様の
『うさぎのお守り』をプレゼント！

こちらから感想をお寄せください！→
※お葉書でもお受けいたします。
640-8411　和歌山市梶取17-2
株式会社ウイング　ほうぼわかやま係　宛
〆切 2024年3月末日

株式会社ウイング　さくらノート 和歌山　COURSE コース

地域と企業のブランディングをお手伝いする広告・制作会社です。「ほうぼわかやま」の発行や本づくりを通じた地域文化の振興を目指しています。就職応援BOOK「COURSE（コース）」や、キャリア教育本「さくらノート」も発行しています。［沿革］創業1972年。設立1981年。

2023年12月15日　発行人／松下忠　編集長／宇治田健志　発行／株式会社ウイング
本社　〒640-8411 和歌山県和歌山市梶取17-2　TEL.073-453-5700／FAX.073-453-5522
E-mail：mail@w-i-n-g.jp　https://w-i-n-g.jp